

令和8（2026）年度6月「歳時記」

6月は、春から夏へと季節が大きく移り変わる時期です。山々の緑はいっそう深まり、田には水が張られ、早苗が風に揺れる光景が広がります。雨の日も増えてきますが、その雨は自然に潤いを与え、命を育む大切な恵みにもなります。

今年は、6日に「芒種」を迎えます。芒種とは、稲や麦のように穂先に「芒」を持つ穀物の種をまく頃という意味です。昔から農作業の節目として大切にされ、日本の田植えの風景とも深く結びついています。田植えを終えた水田に空が映り込む様子は、この時期ならではの美しい景色です。

また、21日は「夏至」です。年間で最も昼の時間が長くなる日です。太陽の光が力強さを増し、本格的な夏の入り口を感じさせます。しかし、西日本ではちょうど梅雨の時期に重なるため、実際には曇りや雨の日が多く、実感しにくいというのが現状でしょう。

6月の雨は「五月雨」とも呼ばれます。本来は旧暦5月頃に降る長雨を指した言葉で、静かに降り続く雨の情景には、日本人の繊細な感性が表れています。雨に濡れた紫陽花や、しっとりとした石畳の風景に心を和ませる人も多いことでしょう。

雨の日が続くと気持ちも沈みがちになりますが、耳を澄ませば雨音の向こうに夏の足音が聞こえてきます。自然の移ろいを感じながら、ゆったりとした心持ちで過ごしたいものです。

<古文>

ある人、五月雨の晴れ間に、里づたひの道をゆく。月は浮雲の薄きに包まれ、芝生露敷いて、貫きとめぬ玉の数は、崑山もかくやとおぼしきに、眺めもいと長き江を、南向きてゆく。芦もまばらに刈る沢のあやめも分かぬところに、堤を沿ふて白犬あり。礫をもつて追へばひたもの逃ぐ。静かにゆけば犬も静かに、止まれば犬も止まれり。かくて、追ふと思ひつつ十四、五町ゆく。一声ほゆる事もなし。それより江の堤には沿はず、我ゆく道は横なりしに犬見えなくなる。こはいかにと又元の方へ戻りて見れば犬あり。不思議の思ひをなすに、何の別の事もなし。濁り水に曇りし月の影、映ろひしなり。犬と思ひしときは月と見えず。月と合点して、なにほど犬に見なさんとせしかども、犬とはかつて見えざるなり。

いちねん おもむ 一<sup>い</sup>念<sup>い</sup>の<sup>い</sup>趣<sup>い</sup>く<sup>い</sup>と<sup>い</sup>ころ<sup>い</sup>異<sup>い</sup>な<sup>い</sup>もの<sup>い</sup>にて、<sup>い</sup>十四<sup>い</sup>、<sup>い</sup>五<sup>い</sup>町<sup>い</sup>迷<sup>い</sup>へ<sup>い</sup>り。知<sup>い</sup>り<sup>い</sup>て<sup>い</sup>後<sup>い</sup>は、迷<sup>い</sup>ふ<sup>い</sup>て<sup>い</sup>見<sup>い</sup>ん<sup>い</sup>と<sup>い</sup>思<sup>い</sup>ひ<sup>い</sup>しか<sup>い</sup>ども、迷<sup>い</sup>は<sup>い</sup>れ<sup>い</sup>ず<sup>い</sup>と<sup>い</sup>語<sup>い</sup>れ<sup>い</sup>り。

### <口語(現代語)訳>

ある人が、五月雨の晴れ間に、里から里へ続く道をいく。月は漂う雲に包まれ、芝生には露が一面に降り、飛び散っている玉の数は、中国の伝説上の山、崑山もこのようであろうかと思われるほどで、眺めもはるかな長い川を南に向かっていく。芦がまばらに刈られ、沢に咲くあやめも見分けがつかないような場所で、土手に沿っていく白い犬があった。小石を投げて追うと、ひたすら逃げる。静かに歩けば犬も静かに歩き、立ち止まれば犬も立ち止まった。そうして、追いかけていくぞと思いつつながら14・5町(約1.5・6キロ)いく。一声も吠えることはない。その後、川の土手には沿わず、自分の進む道は横へそれたので、犬は見えなくなる。これはどうしたことかと、また元の場所へ戻って見ると、犬がいる。不思議に思つてよく考えてみると、何も特別なこともない。濁った水面に曇った月の光が、映っていたのである。犬と思つていたときは月だとは見えない。月だと気づくと、どんなに犬に見ようとしても、犬にはまったく見えないのだ。一心に思い込んでいるときは不思議なもので、14・5町もの間、思い違いをしていた。知つた後は、惑わされて見ようと思つたけれども、どうしても惑わされることはできなかつたと語つた。

出典は「宿直草」です。キーワードは「五月雨」です。「宿直草」は、江戸時代前期に荻田安静によって書かれたとされる仮名草子です。怪異や不思議な出来事を題材にしながら、人間の心の動きや教訓を描いている点に特徴があります。平易な文章で書かれ、当時の庶民にも広く親しまれました。

この話では、月の影を犬と思ひ込む様子を通して、人は思ひ込みによって眞実を見失ふことがある、という教訓が示されています。私は、散歩でたまにおおたがわつつみひとりあるにちようあゆなかおちこき太田川の堤を一人歩きます。そんな日常の歩みの中に、「思ひ込み」への「気づき」と、「眞実」との「出会い」があるのかもしれない。

それでは練習問題です。皆さんぜひチャレンジしてみてください。

＜問題＞

問1 次のうち、古文の内容として最も適切なものを一つ選びましょう。

ア 犬は実際に存在し、最後まで人について来た。

イ 犬は途中で川へ飛び込み、姿を消した。

ウ 人は月の影を犬と思い込み、長い間追いかけていた。

エ 人は沢に咲くあやめを犬と見間違えた。

問2 「ひたもの逃ぐ」の意味として最も適切なものを一つ選びましょう。

ア あちこち逃げ回る      イ 一目散に逃げる

ウ 隠れるように逃げる      エ ゆっくり逃げる

問3 「犬と思ひしときは月と見えず。月と合点して、なにほど犬に見なさんとせしかども、犬とはかつて見えざるなり。」とあるが、このことから分かる人の心のあり方を、30字以内でまとめましょう。

問4 この話が伝えようとしていることとして、最も適切なものを一つ選びましょう。

ア 自然の景色は人の心を豊かにする。

イ 月の光は水面に美しく映るものである。

ウ 人は思い込みによって物事を見誤ることがある。

エ 夜道では犬に気をつけなければならない。

＜解答例＞

問1 ウ      問2 イ

問3 人は思い込みによって真実を見失うことがあるということ。

問4 ウ